

「がん告知 患者の尊厳と医師の義務」

竜 崇正 編集
寺本 龍生

埼玉医科大学包括地域医療部客員教授・埼玉県健康づくり事業団総合健診監

武 田 文 和

昭和 43 年医学部卒業の臨床医が中心になって書かれたユニークな本である。学園紛争の最中に卒業の時を迎えた私の周囲にいた彼らの仲間の多くが、当時の学園紛争を冷静に見つめ、新しい未来に期待をかけ力を蓄えようとの意気込みで医師としてのスタートを切ったと記憶している。その後、多くの経験を積み、今やがん患者の診療を担う主力臨床医に成長した著者らの手によってまとめられた本書は、たのもしき限りである。

本書は、患者の人権を守るために行うがん告知のガイドライン、告知の実際と問題点、分担執筆者それぞれの専門分野からがん患者に病名や病状を伝えるために留意すべき点を具体的に論じ、しばしば遭遇した困難なケースについても考察している。本書を読んだ書評者自身は、“がん患者と真実を語り合うこと”の実現に向けて埼玉県立がんセンターで全職員とともに進めた 15 年間の努力の経緯の中の 1 つ 1 つを想起し、同感する点が多かった。

がんであることを患者に伝える目

的は“伝えること”にあるのではない。本書が述べているように、伝えられて落ち込み、悩む患者の心の動揺を受け止め、患者のペースに合わせて一緒に歩み、そのプロセスの中で患者が自分に適した治療を選択していけるように導くことが目的である。真実を隠すことは患者の人権を尊重していないことであり、そのような関係の中で患者との信頼関係を築くことは難しいのである。そう考えて著者たちは“がん告知”を推進し、様々な問題に遭遇することになった。がん告知を実践するときには避けて通れないこれらの問題と、その解決への模索が自らの経験から述べられており、読者が持っているであろうがん告知後に起こる出来事への不安を軽減し、その対応への力を与えてくれるに違いない。患者に真実を伝えていない医師には特にお読みいただきたい 1 冊である。

本書が示す“がん告知原則論”は、① 責任逃れのためではなく、患者の人権尊重を目的とする、② 患者の状況を踏まえて段階を踏んで進めるが、なるべく早い時期に話し始め

る、③ でできれば家族同席と看護婦の同席も得て患者に直接、顔を合わせて話し、患者の本音に留意する、④ プライバシーが守れる場所で、⑤ その後のケアの良否が成否の鍵、⑥ 病名と予後とは分けて考える、などである。法律家の立場から過去の判例が紹介され、精神科医の立場から患者の心理的変調の経過と対応のあり方が示され、病期別の考察、小児患者における考察、家族の問題、チームワークの重要性も述べられている。自験事例が豊富に示され、各主治医の反省点も卒直である。

この問題についての考え方は日進月歩であり、更に発展させる余地が大きいわが国の現状から、近い将来、更なる進歩に根ざして続編を執筆して欲しいと願っている。そのとき、暗い印象を世間に与える「がん告知」のタイトルは使わないほうがよいと思う。がんの場合のみ“告知”と呼ぶのは、やがて時代遅れとなると考えるからである。

● A 5 頁 216 図 5 表 8 2001 定価(本体 3,500 円+税) 送料実費

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)